

---

## A 班 (広島)

---



ユースリーダー 原田 和季  
班長 竹内 花  
赤松 真帆  
宮本 結月  
堀田 知宏  
三枝木 玲花

私の  
平和宣言

## 平和を追求する

## 派遣報告

## 被爆者たちの思いから復興とは何か探る

私は今回の平和学習を通して、「復興」という言葉の本当の意味を改めて考えさせられました。派遣前の事前学習会では、復興とは単に街が再建され、建物や道路が整うことだけを指すのではなく、そこに暮らす、あるいは暮らしていた人々の思いや心の再生も含まれるものであると学びました。実際に広島を訪れ、被爆者の方のお話を伺った際、そのことをより深く実感しました。私が「何が一番辛かったのか」と質問したところ、その方に「被爆者は結婚してはいけない」という風評被害が最も辛かった。そして、「平和資料館で『被爆者も結婚してよい』という言葉を見るまで、その偏見に苦しめられていた」と答えていただきました。このお話を聞いて、街並みがどれだけ復興しても、被爆者の方々の心の傷が完全に癒えるわけではないという現実気づかされました。広島の復興は物理的なものにとどまらず、人々の心の痛みや差別と向き合いながら、真の意味での「平和」と「再生」を模索してきたのだと感じました。私はこの学びを通して、復興とは人々の尊厳を取り戻す営みでもあるのだと感じました。

## 応募理由

私は小学4年生の時に本プログラムで広島を訪れ、平和の大切さについて学びました。社会に出る前の今、改めて平和について学び直したいと考え、参加したいと思いました。当時本プログラムで広島を訪れ学んだことや、当時から10年経ち学んだ様々な知識から、当時とはまた異なる視点で平和について向き合えると感じています。プログラム内容も当時とは変わっているので、再び参加することでより深い学びが得られると考えています。

私の  
平和宣言

## 戦争を自分ごととして考える

## 派遣報告

## 派遣報告

「国破れて山河あり」たとえ戦に敗れて国が滅びたとしても、山や河の自然は昔の姿を保ち残り続ける。約 1300 年前、唐の詩人・杜甫の「春望」の一節だ。

しかし、平和記念式典の最中に広島県知事から出た言葉は「国守りて山河なし」だった。国を守るために核兵器を使えば、山や河は汚染され、2 度と元には戻らなくなる。杜甫の時代から科学は進歩し、人間の生活は大きく変わった。1300 年で人間は、山や河を破壊する力を持ち、その力を抑止として使っている。広島県知事は核抑止について、力の均衡による抑止は繰り返し破られ、抑止とは概念又は心理であると言い切った。そして投下からたった 80 年、再び核戦争への警戒が高まっている。このままでは国民、国土が復興不能になってしまう。これは想像できない未来の話ではなく、経験する可能性の高い未来の話である。

平和学習を通して、原爆を歴史の一部として考えるのではなく、自分ごととして考える事が大切だと思った。たった 80 年で同じことを繰り返してはいけない、被爆者の紡いできた思いを伝承しなくてはならない。私も原爆について自分ごととして学び続け、伝えていきたい。

## 応募理由

私は放射線に関心があり、昨年探究学習で原子力発電と放射線について調べ、全校発表を行いました。その時、原爆の熱線による建物への影響や原爆病の被害について書かれているものを多く目にしたことで、原発以前に起こった世界で最初の放射線被害である広島原爆についてきちんと知りたいという気持ちが湧きました。戦後 80 年、当時の状況を知る方が少なくなっていく中、現地の方に直接お話を聞ける最後の機会だと思い応募しました。

私の  
平和宣言

## 声なき声に耳を傾け、平和の花を育てる

## 派遣報告

## 広島で学んだ、“平和を守る責任”

私はこの平和学習広島派遣プログラムを通して、原爆による被害の実態を自分の目で確かめ、戦争と平和について深く考えることができました。広島では、原爆ドームや平和記念資料館、そして袋町小学校を見学しました。

特に印象に残ったのは袋町小学校です。原爆投下当時、多くの人々が避難や救護のために集まった場所で、現在は校舎の一部を平和資料館として公開しています。校舎には被爆した当時の壁や階段が残され、黒く焦げた跡やひび割れた壁が原爆の恐ろしさを伝えていました。実際にその場所に立つと、80年前の日常であったはずのあの日の出来事が目の前で起きているように感じました。

また、ここに展示されていた体験記や壁の伝言も印象に残りました。家族を探す人や無事かを伝える言葉が壁に残されており、そこには、あの日まで私達と同じ暮らしをしていた人達の悲痛な叫び、数字や記録では表せない、一人一人の命と強い思いがありました。

この学習を通して私は、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさだけでなく、過去としっかり向き合い、平和を守る努力の大切さを学びました。広島で学んだことを胸に、思いやりの心を持って行動し、平和を守り受け継ぐ人になりたいです。

## 応募理由

毎日ニュースを見ると爆撃の映像が目に入り、先日ローマ教皇が代わってすぐ、戦争をやめるようにと発表していました。私はキリスト教の学校に通って、核を何回も体験している日本人としてできることがないか考えています。広島原爆記念碑に「あやまちばかりかえしませぬから」と書かれているが、主語がはっきりしないという本を読みました。私はこの「主語」にならないといけないと思って、広島に行ってみたく思いました。

私の  
平和宣言

## 未来を生きる人も幸せだと思えるように

## 派遣報告

## 戦争を知ること

終戦から80年。本当の戦争を知る人はとても少なくなりました。それに最近は終戦の日を知らなかったり、原爆がどこに落とされたのかを知らない人がいます。私はこうして「戦争の恐ろしさ」を知らない人が増えていくと、平和がどんどん減っていくと思いました。平和を保ち、世界中から平和をなくさないために、平和学習に参加した私たちが身近な人でもいいので、広島で得た知識を発信していく必要があります。原爆資料館では、たくさん外国人の方がいて本当にうれしかったです。こんなにたくさんの人たちが世界中の平和を願い、原爆のこと、戦争のことを知ろうとしてくれていて、私も本当にあった戦争のことをさらに深く学ぼうと思いました。今を戦前にしないように私たちはこれからも戦争を知ることが重要になってくると思います。今ある「当たり前の日常」を大切にして、いつか世界中の人たちも「当たり前の日常」を感じれるようにしていきたいです。私たちだけでなく、これからの未来を生きる人が幸せに生きれるように戦争を知る必要があると思いました。

## 応募理由

理由は学校で学ぶ「平和学習」では、もちろん原爆のことを説明していただけますが、やはり、実際に被爆を体験した方が体験した「本当の戦争のおそろしさ」を実感して友達や先生、家族に教えてあげたいと思ったからです。それに、今まで当たり前としてきた「自由な生活」についてあらためて、その幸せを感じておきたいと思ったからです。今から未来をつなげるために、昔本当にあった悲しくて辛い過去を知ろうと思いました。

私の  
平和宣言

## 身近な人から仲良く笑顔

## 派遣報告

## 平和のバトンをつなぐ

僕が、このプログラムに参加して印象に残っていることは、二つあります。

一つ目は、今回応募する動機にもなった被爆者の方のお話です。原爆によって、姉を亡くし、母は約五十個ものガラス片で大怪我をし、ご本人も差別に苦しみました。思い出すだけでも辛い体験を、未来の平和を思って話してくれました。実際にお話をうかがうことで、本やテレビよりも、自分におきかえて想像することができました。「三度許すまじ」という思いをしっかりと受け止め、つないでいきたいです。

そして二つ目は、被爆電車に乗って市内をまわったことです。講師の方から、御幸橋は、戦争に向かう兵隊さんたちが泣きながら渡っていったので『帰らぬ橋』と呼ばれていたと聞きました。その場面を想像すると、悲しみを感じ胸が痛みました。

今回のプログラムで、被爆者の方の生の声を聞き、遺品なども目の当たりにして、原爆について知ることができました。もう絶対に戦争を起こさないために、僕は、これからもこの様な活動に参加し、平和の輪を広げていきたいです。

## 応募理由

1. いずれ被爆者の人の話が聞けなくなってしまうので、いまのうちに実体験を聞いておきたいから。
2. 世界中から来ひん者が集う平和記念式典に出席でき、全国で一斉に行う黙とうを現地でできることが、とても貴重だから。
3. 八十年前と耳で聞いても分からないけど、電車の古さを感じてみれば実感できると思ったから。
4. もう絶対二度と戦争をくりかえしてはいけないと思ったので広島に行けば、より多くの真実を知れると思ったから。

私の  
平和宣言

## 平和の花を育てられる私になる

## 派遣報告

## 平和の花を届けたい

私がとても印象に残ったお話しがあります。被爆者の梶矢さんのお話しです。心にズシンと重い石が乗ったような苦しい気持ちになりました。梶矢さんが小学一年生の時に、お姉さんは原爆で亡くなってしまいました。どちらが水を汲みに行くか揉めて、水を汲みに行くことになったお姉さんは一瞬にして命を奪われてしまいました。被爆者の影と言われている「人影の石」も見学しましたが、一瞬で命を奪われた人がここにいたということを強く感じました。あたり前の生活が始まったばかりの朝だったのに、一瞬にして壊され、失われてしまったのです。

私と同じくらいの子供も大勢亡くなってしまったり、悲しい思いをしたのだと思います。想像しただけでも涙が出ます。

私は今回の平和学習を通して、亡くなってしまった人達の思いをきちんと知らないといけないと思うようになりました。実際に会うことはできませんが、話を聞いてあげたい、そう思いました。みんなの思いをできるだけ多くの人に届けたいです。私が生活している藤沢市を平和の花でいっぱい町にしたいです。そして、その花を亡くなってしまった人に届けたいです。

## 応募理由

小さい頃、ウクライナとロシアが戦争を始めた日の夜、怖くて、お母さんに抱きついて寝ました。向こうの子達の気持ちをおもい涙が出ました。私にはロシアの血が少し流れているそうです。ロシアと日本も戦争したことがあると知って、とても辛い気持ちになりました。どうして戦争になってしまうのだろう。仲良くするのは、どうしたらいいのかな。そのことを勉強したいと思います。

---

## B班（広島）

---



ユースリーダー 上崎 康生  
班長 佐々木 峻  
須藤 美羽  
太田 佳奈美  
下重 晴楓  
米倉 望継



## 「持つ力」より、「捨てる勇気」を。

### 派遣報告

#### 平和学習報告

広島県知事の湯崎氏は平和記念式典でこう述べました。「国守りて、山河なし」これは、たとえ国という枠組みや体制が守られたとしても、核兵器による戦争が行えば、人々の暮らす大地や自然環境は壊滅的な被害を受け、国民の生きる場所そのものが失われる、という強い警鐘です。歴史を振り返れば、核兵器は「抑止力」として存在してきましたが、武力による均衡はしばしば破られてきました。人類は何度も「二度と繰り返さない」と誓いながらも、戦争や侵略を繰り返してきたという現実があります。つまり、「抑止」だけに頼る安全保障は、平和を守ることができません。私は、この点において核兵器の廃絶が不可欠だと考えます。たとえ抑止が崩れたとしても、人々が生活を続けられる社会と環境を守るためには、核兵器という破滅的な手段を完全に排除する必要があります。核兵器は一度使用されれば人間の生命だけでなく、自然、文化、そして未来世代への希望をも同時に奪う存在です。「国が守られても、国民が生きられない世界」に価値はありません。だからこそ、国際社会が協力して核兵器廃絶への道を進むことが、人類にとって最も現実的かつ道徳的な選択だと、私は信じています。

### 応募理由

義務教育課程では被爆地広島を訪問しましたが集団生活のルールやマナーを学ぶ事が目的の訪問でした。しかし、私は現地の戦争の悲惨さ、命の大切さが直接的に感じられ平和に対する思いが芽生えていたと思います。近年世界各地で内戦や紛争が頻発しています。テレビ報道で各国の争いのニュースがある度に我国の被爆地について言われます。私は大学生になった今、今一度平和について理解し平和とは何かを学びたいと考え志願しました。



## 対話による平和の実現を目指す

### 派遣報告

#### 争いを対話に

私は幼い頃から平和な生活を過ごしてきましたが、広島派遣プログラムに参加し、その尊さを改めて実感しました。原爆ドームや平和記念館で見た手記や写真から「もっと生きたかった」という切実な思いが伝わってきました。灯籠流しでは、水を求めて川へ飛び込んだ人々を思い、戦争の悲惨さを強く感じました。私は原爆を始め、戦争に使用される全ての兵器が無くなることを願いました。

しかし、今まで平和に生活してきた世界には、原爆も兵器も数多く存在しています。この社会から兵器をなくすというのは理想に近いのかもしれませんが。その現実を前提にして、今後いかに平和を築いていくのが課題だと思います。重要なのは争いを暴力や武力に発展させない仕組みを整えて対話を重ね、相手を理解しようと努力し続け、公正なルールで衝突を和らげていくことだと思います。同時に教育を通じて他者を尊重し、多様性を受け入れる価値観を育てていくことも欠かせないと考えました。

このプログラムを機に見て考えたことを自分の原点として、小さな一歩でも、自分にできる形で平和に貢献していきたいと思っています。

### 応募理由

昨年12月、沖縄戦跡を父と共に訪れ、教科書や映像では感じられない戦争の現実を肌で感じました。現地に立ち、記録や空気に触れることで、戦争の実相に少し近づけたように思います。戦争を知らない世代だからこそ、現地を訪れ、自らの言葉で平和の大切さを語り継ぐ責任があると強く感じました。この気づきを多くの人と共有したく、広島でも同様の学びを得たいと考え、本プログラムに応募しました。

私の  
平和宣言

## 被爆者の想いを未来へと繋ぐ、架け橋になる

## 派遣報告

## 未来へ紡ぐ私たちの使命

日本が終戦を迎えてから80年が経ちました。私は広島派遣から帰った後、「終戦80年スペシャル」を観ました。そこでは日本の戦争や原爆だけでなく、世界の終戦の日の迎え方が紹介されていました。戦勝国はパレードやお祭りが開かれ、終戦から80年経ったことを知らない人もいました。一方、他の敗戦国では式典はないものの、厳かな雰囲気でお迎えしており、国によって戦争への関心に大きな差があることに驚きました。

「核兵器廃絶がいつ達成できるかわからない。だが諦めないことが大切だ。」これは被爆者の梶矢文昭さんの言葉です。核兵器廃絶や戦争のない未来がいつ実現するか私にもわかりません。

しかし、世界中の人々が戦争について関心を持つことで、その日は少しでも早く訪れるのではないのでしょうか。核兵器廃絶という目標が叶い、戦争のない世界は、とても美しく輝かしい未来なのではないかと思います。被爆者の方々から受け継いだ平和への想い。これを未来へ繋げていくのは、私たち一人ひとりの使命だと思います。

## 応募理由

私は広島に一度だけ小学校卒業前に家族と行ったことがあります。原爆ドームや平和記念資料館を訪れ、戦争や原爆の恐ろしさを知りました。中学生となり、さらに深く歴史を学び、いつまでもあの悲惨な出来事を忘れないよう三度目の核兵器使用を許さないような社会を作っていきたいと思います。そして被爆者のご冥福を祈る平和記念式典を現地で世界各国の人と参列し、被爆者の言葉や、平和への思いを直接感じたいと思ったからです。



## 争いのない世界への決意

### 派遣報告

#### 曾祖父から受け継いだもの

私の曾祖父はシベリア抑留から帰還した後、「平和が一番」と口癖のように言っていたと母から聞きました。その言葉の本当の意味を確かめるため、平和学習に参加しました。実際に目で見ることによって、戦争の恐怖を身をもって感じる事ができました。印象に残っているのは袋町小学校と旧日本銀行です。小学校は爆心地から約460メートル離れた場所で大勢の人が犠牲となり、被爆時は救護所となりました。今では階段の壁面に被爆者の消失やたくさんの千羽鶴が飾られています。銀行は爆心地から約380メートルの距離にあり、たくさんの被害が出ました。そこには被爆死の写真や昔の道具などが掲示されています。これらを通して言葉には表せないほどの悲痛を感じました。被爆者やその家族からお話を聞き、今まで私が理解していた以上に深刻で、戦争の真の怖さを感じました。

私達は「なぜあんなにも恐ろしい核兵器がまだ世界中にあるのか」「なぜ無関係な人々を巻き込み、多くの犠牲を生むような争いが起こるのか」を考えていくことが大切です。私が体験したことを身近な人に語り継いでいくことが平和を守るためにできることだと決意しました。

### 応募理由

小学3年の時、空襲のドキュメンタリーを見て原爆に興味を持ち始め、授業で本を借りるときは被爆者の体験記を読んできました。兵隊として満州に行った私のひいおじいさんの捕虜の記録を何度も読みました。ひいおじいさんは娘（私の祖母）、孫（私の母）に「平和が一番」と言い伝えてきたと聞きました。県外の戦争や被爆を知ることでもひいおじいさんと同じように「平和が一番」という心を次世代につなげていきたいと思っています。



## 他者の立場を重視して平和をつくる

### 派遣報告

#### 平和をつくる

私が戦争や原爆に興味を持ったのは、4年生のときに沖縄戦の『対馬丸』という映画の最後で主人公が「子どもで生きていた人は約50人」という言葉に鳥肌がたったときでした。今回の平和学習で私が印象に残ったものは、原爆で亡くなる前に子どもが着ていた服と弁当箱、そして心の被爆です。これらに共通しているのは、戦争中でも生活をしてきた日常を突然奪ったことです。楽しみにしていること、やりたいことなど人々の希望ごと奪う。生き残った人々の心に闇を残し、それにより差別や生活の制限をされる。そんな場面を思い浮かべると、本当に悲しい気持ちになり、これが対馬丸の話を知った時の鳥肌の理由なのだと分かりました。

原爆投下から80年の平和記念式典での広島市長の平和宣言では、核兵器のない平和な世界をつくるためには、たとえ自分の意見と反対の人がいても、まずは話をしてみる、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神の大切さを若い世代へ伝え続ける被爆者の姿を通して学びました。私達が今できることは、差別抑圧がなくおたがい尊重しあえる関係を築いたり他者の立場を重視して平和をつくることだと思います。

### 応募理由

学校で沖縄戦の対馬丸という映画で最後に主人公が「子どもで生きていた人は約50人」と言っていて、その言葉に鳥肌がたち、YouTubeで動画や映画で「この世界の片隅に」「火垂るの墓」を見ました。戦争や原爆で人が亡くなる悲惨さを日本が伝えたことで今の日本の平和があるのだと学びました。広島平和記念資料館での展示や語り部さんの話を見たり聞いたりし、戦争や原爆の悲惨さを他の人に伝えられるようになりたいです。



## 悲劇を決して忘れず、今を生きる自分が 小さなことでも一つ一つ積み上げていく

### 派遣報告

#### 原爆は使ってはならない、そして式典の意義は何か

僕が広島で感じた圧力は想像以上だった。そして梶矢さんの被爆体験講話からは、当時の人の憎しみや悲しみを感じた。梶矢さんが何度も口にし、強調していたのは、「三度許すまじ」という言葉だ。原爆は大勢の人の命を一瞬にして奪い、やっとのことで生きのびたその後の人生にまで大きく影響を及ぼすものだ。だから、原爆はもう使ってはならない。ただ、今まではひどいことをしていたのは外国だけだと思っていたが、それは違った。本当は日本も相当悪いことをしていたということも知った。

もう一つ広島で感じたことがある。それは式典の雰囲気についてだ。資料館で偶然出会った被爆者の方と話した。その方は去年の式典に出た時、「これは祭りか？」と思ったそうだ。僕らが話を聞いた日の夜、とうろう流しに出た時、はしゃぎながら写真を撮っている人を見ながら被爆者の方の話を思い出した。僕は慰霊の気持ちが薄れて祭りになってしまうのではないかと思った。だから、こんな悲惨な出来事があったことを忘れずに、亡くなった人や傷ついた人への思いを寄せることが大切だと改めて思った。そして僕も含め、一人ひとりが年に一度でも慰霊の気持ちを持とうと思いました。

### 応募理由

去年の11月に被団協がノーベル賞をとった時の代表 田中熙巳さんのスピーチ聞いて、衝撃を受けました。広島と長崎への原爆投下を勉強したときには、核兵器廃絶の大切さを理解していませんでした。しかし、去年のスピーチをニュース映像と一緒に見たときに、核兵器がもたらす被害の大きさを知り、二度と起こしてはいけないと強く思いました。そして核兵器廃絶を訴えることの大切さを感じ、もっと勉強してみたいと思いました。

---

## C班（広島）

---



ユースリーダー 高辻 湊  
班長 小澤 あいら  
山口 陽菜乃  
七海 幸人  
叢 楓  
橋野 颯来



## 平和について考え、語り続け、学び続け、未来へ届ける

### 派遣報告

#### 平和のために今私たちができること

広島は今年、被爆80周年を迎えました。私は今まで歴史上での原爆のことを学んでそれなりに分かっていたつもりでいました。しかし実際に広島を訪れ、自分が目にした被災地の跡では言葉では言い表せない悲しみと怒り、無念さ、絶対に繰り返してはならないと強く思う気持ちで一杯になりました。

広島を訪れて改めて、命の尊さと平和の重みを深く実感しました。広島が教えてくれたのは、過去の悲劇を忘れず、未来に語り継いでいくことの大切さです。平和とは、誰もが暴力に怯えることなく生きられる日常であり、それを守るには、私たち一人ひとりが戦争の悲惨さを学び、語り継ぐ責任があります。被爆者の高齢化によって悲惨な過去の記憶が薄れていく中、戦争を繰り返さない世界を築くために、若い世代が声を上げ、行動することが求められていると思います。

今回の研修で、私は「伝える力」と「考える責任」について学びました。広島悲劇を世界へ、そして未来へと発信していくために自分には何ができるのかを考え続け、行動を起こしていきたいと思います。

### 応募理由

藤沢市でこのような派遣プログラムがあることを初めて知りました。今年から大学生になったので、ユースリーダーとして取りまとめていく役目を引き受け、皆で戦争で起こった事実を確認すべく現場を訪れ、被爆の真相に触れ、今自分達にできることは何か、平和について皆で考える機会としたいと思い、応募します。

私の  
平和宣言

## 核兵器のない世界

## 派遣報告

## ヒロシマ

「絶対に原爆を繰り返してはいけない」と身をもって再確認できたこの派遣プログラムでは、八月五日から八月七日までの二泊三日間を広島で過ごしました。私は初日に行った原爆ドーム周辺にある被爆遺構展示館での出来事がとても記憶に残っています。その施設には、現在の広島の地から約50メートルほど掘られた様子が展示されており、そこには、まっすぐに延びている土の被った白いコンクリート、ガタガタに崩れた石、瓦。それらは、原爆が落とされた当時の道路と家の瓦礫でした。そこにいたスタッフの方が説明をしてくださり、最後に「今歩いている土の下にはこのようなものが大量にあるんです。原爆当時のものが真下にあると思って歩いてみてください。」と言われました。私は、その言葉を聞いて鳥肌が立ちました。もう、現代には資料館など以外に残っていないと思っていた原爆の被害が今の私たちの生活とこんなにも密接にあったということに驚きを隠せませんでした。また、スタッフの方が仰られたように歩いた広島は非常に苦しく、歩きづらかったのがとても印象的でした。

私はこの学習を通して、今後必ず原爆の被害を語り継ぐことのできる人間になります。

## 応募理由

2008年に生まれた私は、授業などで習う原爆、戦争はまだ現在の日本とかけ離れ、遠い世界のことだと思ってしまいます。私たちがそうなのだから、これから生きる私たち以上の若者はもっと現実であったことを感じられないのでは無いのかと私は思います。

原爆投下は、今後必ず忘れては行けない出来事です。その出来事を次は語り継いでいくのが私たちだと感じています。その架け橋になりたい、と思い参加を希望します。

私の  
平和宣言

大人になってもずっと戦争の悲惨さを伝え続ける。

## 派遣報告

## 原爆投下の悲劇

なぜこのテーマにしたのかというと今回の平和派遣で原爆がどれだけの被害を出し人々の心に傷をつけたかを学んだからです。私は平和記念資料館に行って原爆が落ちたことで、たくさんの家族を亡くしてしまった人たちや亡くなってしまった人たちがいることを知りました。しかも生き残っても家族を亡くしてしまった悲しみや、原爆の放射能による後遺症で生き残ったとしても周りの人たちや社会から差別を受けたと知りました。原爆が一つ落ちただけでもとても大きな被害があったのに、もし今原爆が自分の家に落ちたら範囲も広くなり、威力も強くなっているのを助からないと感じました。実際想像してみて、原爆が落ちてきたところにいた人はその後も差別や後遺症で心も体もぼろぼろだったと感じました。そして多くの人が原爆のせいで亡くなってしまったと知り、原爆が落ちたことによって起きた影響を知らない人に私がこの平和派遣で学んだことを伝えようと思いました。

## 応募理由

私は小学生の頃にゴジラが好きで何度も観ているうちに興味が湧き、その中でも初代ゴジラは水爆実験によって、住む場所を奪われた古代生物だと知って原爆や水爆について興味をもったからです。国語や社会の授業でも原爆や戦争、平和についての授業があり教科書やコンピューターなどを駆使して学んでいくほど興味も増えていき、また広島や長崎に行ったことがなく、原爆ドームなどの物を実際に目で見て体験してみたかったからです。



## 過去の悲しみを風化させず、平和の尊さを語り継ぐ一人でありたい

### 派遣報告

#### 広島で見つめた「平和」の意味

広島での平和学習を通して、平和とはただ戦争がない状態ではなく、人が互いを思いやり、共に生きる努力を続けることだと感じました。平和記念資料館で見た焼けた衣服や壊れた日用品は、単純な言葉では表すことの出来ない一人ひとりの人生の重みを物語っていました。展示物の前で立ち尽くし、「もし自分だったら」と想像したときはただただ恐ろしく、言葉を失ってしまいました。

また、平和記念式典での黙祷の時間は、過去と現在が静かに結ばれた瞬間でした。被爆者の方の「憎しみではなく、思いやりを伝えてほしい」という言葉が心に深く残っています。

戦争の記憶を知り、考えることは悲しみを知ることであります。しかし、それを受け止めて次の世代へ語り継ぐことこそが、平和を守る第一歩だと思います。全身全霊で受け止めたこの広島での想いを忘れることなく、平和の尊さを語り継ぐ一人でありたいと強い使命感を得ることが出来ました。

### 応募理由

曾祖母の死を通し戦争の時代を生き抜いた人間の生の声を聞く事が出来ていたという事がどれだけ貴重な事であったのか感銘を受けました。もう曾祖母から直接話を聞くことは出来ませんが、これからの未来を担う私達は過去の過ちを知り同じ過ちを繰り返さない為の行動を創造し続け、後世に戦争の恐ろしさを伝えて行くことは使命の一つに感じました。自身の五感で全身全霊尽くし直接この目で確かめたいと考え参加を決意致しました。

私の  
平和宣言

## 私達の平和の中の苦しみを語り継ぐ

## 派遣報告

## 広島で原爆について学んだ私たちの課題

私は広島派遣プログラムの中で特に本川小学校平和資料館と被爆者の梶矢文明さんのお話が心に残った。本川小学校は原爆投下後の広島市周辺の模型などがあり、当時の悲惨さを肌で感じる事ができた。広島市周辺の模型には爆心地からの距離点々と書かれていた。その距離の表示を見て、半径2Km内は物がほぼ何もなく、とてつもなく被害が凄く、原爆はものすごく恐ろしいのだと改めて実感した。次は梶矢さんのお話だ。被爆時、梶矢さんは姉と大須賀分散授業所で朝の掃除をしていて、梶矢さんはかすかに光が見えた後、瓦礫の下敷きになったそうだ。被爆後、梶矢さんの母は8月6日が来るたび泣きながら手を合わせていたそうで私はこの話を聞いて胸が締め付けられていたたまれない気持ちになった。私は広島派遣の全てが貴重な経験になったと思う。ただ、これだけで終わりではなく、広島で経験してきたことを鮮明に伝えていくことが真の課題だと思う。

## 応募理由

私がこのプログラムに興味を持った理由は、日本国憲法の平和主義の学習でした。原爆が落とされた国が日本しかないと知った時は衝撃でした。そして私は原爆のことが詳しく知りたくて調べてみましたが、実際に現地に行き、当時の状況を目で見て学習できるのは今しかできない経験だと思い、参加を希望しました。戦争はすごく他人事だと思っていましたが、ロシアとウクライナの戦争のニュースを見て身近で起こっていることなんだと実感しました。

私の  
平和宣言

## 未来の僕たちが安心して笑える世界にします

## 派遣報告

## 広島から未来へ 平和をつなぐ旅

八月六日、広島市の平和記念式典に参列しました。原爆が落とされた午前八時十五分、会場は静まり返り、鐘の音が響きました。そのしゅん間、八十年前に起きた悲しみを強く感じました。

被爆者の証言を聞く機会をいただいたり、広島平和資料館では、焼け残った洋服や写真をたくさん見ました。熱風や放射線の恐ろしさ、人々の苦しみを知り、僕は言葉を失いました。事前学習で調べていた内容が、現地で一気に現実となったようでした。同じ日本で起きたこととはとても思えないほど悲さんでした。

戦争や原爆は、遠い昔のどこかの国の出来事ではありません。日本で本当に起きたことなのです。だからこそ、僕たちが学び、それを次の世代へ語り継いでいくことが大切なのだと思います。

僕は、広島で自ら見て聞いて学んだことを忘れずに、学校や家庭でも平和の大切さを伝えていながら、さらなる学びを広げていけたらと思っています。

## 応募理由

実際に現地を訪れなければ、教科書や映像だけではわからないのではないかと考えました。それらを余すことなく感じ取りとるために、ぜひ参加したいのです。戦争は、どこかの遠い昔の話ではなく、現実にあった出来事なのだと実感したいです。

原爆や戦争の悲惨さについて知ることは、単なる知識や教養としてではなく、世界で唯一の被爆国である日本に生まれた僕たちの使命であると思ったからです。